

わが街、わが地域の史跡・遺跡を訪ねる(2)

— 南新木3丁目「沖田公園」と「千間堤」 —

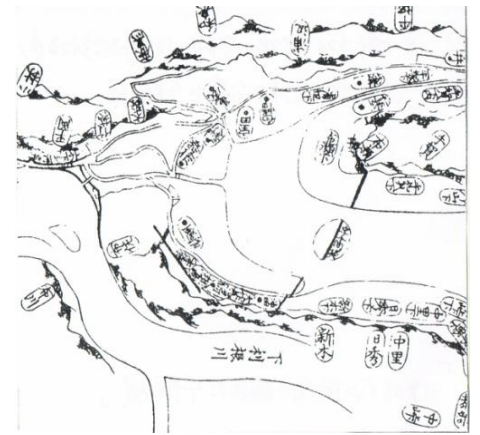
我孫子市史研究センター いいじろ 飯白 和子(吾妻台在住)

今回は、南新木3丁目にある沖田公園と江戸時代に手賀沼に築かれた千間堤の話です。

丘の公園の前の道路を、手賀沼を左に見ながら3丁目に向かって進むと、「越後尻調整池」に出ます。さらに進むと「南新木沖田公園」に出ます。こ



こは、災害時避難場所にもなっているところです。「沖田公園」の沖田は、下新木地区の旧村名です。



南新木沖田公園と地名

江戸時代の新木村は、新木(荒木)村と沖田村の二つの村からなっていました。文化年間(1804-1817)に荒木を上組、沖田を下組とし一村形式にしたようです。地名は歴史資料でもあるといわれています。開発や住居表示法施行などで、新しい地名に変更されていくなかで、この公園に「沖田」という歴史的な意味を持つ地名が付けられています。

沖田公園からは、手賀沼の干拓地が一望に見渡せ、遠方には旧浅間通りから、手賀沼川に架けられた浅間橋も望めます。このところが江戸時代に築かれた「千間堤」の跡です。

徳川8代将軍吉宗の時代に、紀州の豪商高田友清(ともすみ)という人が、手賀沼に沖田村から500間、布瀬村(現柏市沼南町)から500間の堤を築いて、上沼、下沼に分ち、排水路を設けて水を利根川に落とし、二万石の新田を開発しようと壮大な夢に取り組みました。私財を投じ同郷の紀州流土木技術の巧者といわれた井沢為永(弥惣兵衛)の指導で、享保13年(1728)に着工したといわれています。幕末の歌人で国学者でもある小山田與清(ともきよ、後に高田家の養子となり高田與清)の「相馬日記」に「享保十三年、吾とうつおやの友清の翁、いさをしき心をおこし、千万金をすてて堤を築き成れしゆえに、二万石あまりの新田をひらけしという、その堤を高田堤とよべりとなん」と書かれたこともあり有名になりました。

この堤は、元文3年(1738)の洪水で破壊したといわれていますが、『東葛飾郡誌』(大正12年刊)に次のような伝承が載っています。「元文五年申八月十五日夜、村々人足三千五百余人の人々二手に分かれて、一手は相馬郡布施村宮下に集中し、一手は相馬郡沖田村の下に集中し、中里村の荷へ塚山(現湖北台5丁目付近の沼縁にあった二つの塚を担い塚といった)にノロセ(烽火のこと)を置き、之を合図として一時に猛烈なる勇勢にて千間堤を破壊されたり、遂に40尺余の切れ所となれり、下沼開墾は追々廢田となれり」。実際にこのようなことがあったとは考えられませんが、近年、堤は完成するが元文3年をまたず利根川の逆流による内水洪水で破壊され、井沢弥惣兵衛の関与も疑問視する説がでています。(絵図:『口訳利根川図志巻3』嵩書房刊より)